

J.S.S.W NEWS

日本ソーシャルワーク学会通信

2024年10月31日

【発行責任者】小山 隆

【編集責任者】池田 雅子

No.140

Contents

I. 巻頭言「ソーシャルワークと周縁化集落、地域住民のエンパワメント」	渡辺 裕一	1
II. 日本ソーシャルワーク学会第41回大会報告		2
III. 2024年度第2回理事会報告		12
IV. 2024年度総会報告		13
V. IVに関連して2023年度決算および2024年度予算書		24
VI. 書籍 自著紹介		29
VII. 会員の声		30
編集後記	池田 雅子	31

I. 巻頭言

ソーシャルワークと周縁化集落、地域住民のエンパワメント

武蔵野大学教授 渡辺 裕一

(学会理事 研究第3推進委員会 / 総務委員会)

2024年元日の地震によって大きな被害を受けた能登に、続けて大雨による甚大な被害が降りかかることを誰が想像していただろうか。仮設住宅のカギ渡しや入居が進むさなか、入居したばかりの仮設住宅も床上浸水の被害を免れなかった。はじめにこの災害によって被災された方々にお見舞いを申し上げるとともに、亡くなられた方々に心から哀悼の意を表したい。

日本列島は、繰り返しの「記録的な大雨」に見舞われ、「線状降水帯」という少し前まで聞き慣れなかった単語はそれほど珍しいものでもなくなった。「異常気象」が当たり前になり、「前例がない」自然災害が全国各地で続けざまに発生する状況に接し、「まさかこうなるとは」という言葉ももうすでによく聞く言葉になってしまった。

そのような中で起きた能登への大雨は、まさに「まさか」であり、あるテレビニュースでは「能登に100年に一度も降らない大雨が降った」という表現で、今まではあり得ないことが起きている状況が説明されていた。

地震や大雨によって多くの集落が孤立する状況になったが、その多くは災害が発生する以前から人口の減少と高齢化の問題に直面してきた地域でもある。そこでは、自然災害の発災後、「この地域に暮らし続けられるのか」という問いが投げかけられるだろう。他者からは、「なんであんなところに暮らすのか理由が分からない」「暮らしが不便なのはあんなところに暮らしているせいだ」「あんなところに人が住んでいるなんて効率が悪い」「自分で暮らす場所を選んだのだから不便さを受け入れるしかない」という声すら聞こえる。これらは、これらの地域の人々に対して災害が発生する前から投げかけられていた言葉でもある。効率性や経済性を全く無視するわけではない。しかし、効率性や経済性、利便性を何よりも重んじようとするものの見方が私たちの深いところにまで入り込んでいることに、危機感を感じずにはいられない。

能登を訪問した際に「(二次)避難先で暮らしている自分は、自分ではないように感じる。家は壊れてし

まったけれど、ここに帰ってきて、はじめて自分らしさを感じることができる。(二次)避難先では、生きる意味を感じられないから、どんなに不便でもわたしはここに帰ってきて暮らす。小さくてもいいから、ここにもう一度、暮らせる家を建てたい」という高齢者の言葉を聞いた。生命の安全性の確保にジレンマを抱えながらも、「環境の中の人」として自分が自分らしくいられる場所はどこなのか、自分でも言語化できないその場所と自分の関係は何なのか、目には見えないけれど確かにそこにあるもの・そこにしかないものは何で、それを大事にして生きることを意味は何なのかを、問われているような気がした。そして、この問いかけに対してわたしたちソーシャルワーク専門職には何ができるのか、考えるきっかけになった。

災害は、被災した地域の人々に大きな影響をもたらしている。住まいや地域を奪われた被災後の地域の人々のパワーレス化は特に深刻だと思う。ましてや、そこにあったはずの風景や文化、仕事など、地域と自分を結び付けていた何かを喪失することは、人々から生きる意味さえも奪っていくように見える。特に、人口の減少と高齢化に悩む、地方の農山漁村に地震や記録的な大雨による災害が発生すると、前述したように「この地域で暮らし続けるかどうか」という苦しい選択に向き合わされることになる。

ソーシャルワーク専門職は、災害によってそのように周縁化された集落およびそこに暮らす人々とともに、その人々のエンパワメントを促進することが期待されている。それは、人々の離散や分断を促進することではない。人々が制度等によるサービスや資源を利用できるように配分することは重要である一方で、単に人々を制度にあてはめて、あてはまる人にサービスや資源を配ることにとどまるものでもない。そして、その集落の人々が力を発揮しようとするのを妨げるものでもない。その集落や人々とともに立ち上がり、人々の結束を強め、仲間を集めて組織化し、そこにある生きづらさに向き合っていくためのパワーを生み出すことではないだろうか。

ここでおきる周縁化された集落の人々の変化を、地域住民のエンパワメントの一つとして捉えることができる。絶望的な状況・環境によってパワーレス状態に陥った人々とともにあるソーシャルワーク専門職は、どのようにすれば人々が立ち上がろうとするのに必要な希望をもたらす存在となり得るのか。そのようなおこがましいことを言っただけとはいけないという空気と心の声に抗いつつ、ソーシャルワーク専門職として被災地の問題・周縁化集落の問題に無関心ではいられない。

Ⅱ. 日本ソーシャルワーク学会第41回大会報告

1. 「日本ソーシャルワーク学会第41回大会」を終えて

大会実行委員長：

東京都立大学教授 和気 純子

(学会副会長 / 研究推進第2委員会委員長)

6月29日(土)、30日(日)の2日間にわたり、東京都八王子市にある東京都立大学南大沢キャンパスにおいて、日本ソーシャルワーク学会第41回大会が開催されました。今大会は、コロナ禍の収束をふまえ、全面対面方式によって開催されました。全面対面方式の開催は数年ぶりでしたが、140名を超える申込があり、関係者も加え150名を超える参加者をえて、盛会のうちに無事に終了いたしました。情報交換会にも多くの方々にご参加いただき、和やかな雰囲気の中で交流を図ることができました。実施にあたり、全国および東京都の職能団体の皆様方には、共催団体として多大なご協力を賜りました。この場を借りて、厚く御礼申し上げます。

今回の大会では、開催地である東京の特性をふまえ、「多様性×包摂性～誰一人取り残さないソーシャル

ワーク」をテーマに、基調講演やシンポジウムが組まれました。基調講演は、グローバリゼーションの進展を考慮し、本年4月の総会で会長に選出された国際ソーシャルワーク学校連盟（IASSW）会長のアントワネット・ロンバード先生をお迎えし、国際ソーシャルワーク関連団体が共同で取り組むグローバル・アジェンダ「包摂的な社会変容の共同構築」についてお話いただきました。気候変動、貧困、社会的排除、ジェンダー平等など、まさに現代社会が直面しているグローバルな課題について、世界が共同して変容に取り組む必要性を提起いただきました。講演の後の議論でも、数多くの質問が出され活発な意見交換がなされました。

1日目の大会企画シンポジウムでは、重層的な支援体制の構築、外国人の地域生活支援、山谷地区で展開されてきた生活困窮者支援、困難な課題を抱える女性らへの支援について、研究や実践の第一線で活躍されておられる講師をお招きし、学びを深めることができました。また、2日目の学会企画シンポジウムは、文化的コンピテンスに着目し、国籍や在留資格を超えた支援の展開をめぐり、理論的整理とともに、ソーシャルアクションを含めた開発的な実践について議論を交わしました。いずれも、既存の福祉制度のなかで十分に包摂されてきたとはいえない多様な人々の生活と文化に目を向け、関係性の生成変化を志向する創造的な支援と、そのための、「誰一人取り残さない」支援システム構築の必要性を再認識する機会になったものと思います。

さらに、自由研究発表は5つの分科会で15題の発表が行われ、真摯な議論がなされました。大学院生の方々と職能団体に所属する実践者の皆様と学びあえる機会は大変貴重です。今後も、学会として一層の研究支援を図っていきたいと考えています。

最後に、大会を通じて、多くの参加者の皆様から心温まるコメントやご支援いただきました。実行委員会の皆様をはじめ、関係者、参加者の皆様のご協力にあらためて感謝申し上げます。来年は、関西学院大学での開催が予定されています。大会のバトンをスムーズに繋ぎ、また来年、多くの皆様とお会いできることを楽しみにしています。

2. 基調講演

講師：アントワネット・ロバート（Antoninette Lombard）

（国際ソーシャルワーク学校連盟次期会長）

テーマ「ソーシャルワークと社会開発に向けたグローバル・アジェンダ ～包摂的な社会変容の共同構築～」

コーディネーター：和気 純子（東京都立大学）

挨拶：黒木 保博（長野大学）

コメンテーター：小原 眞知子（日本社会事業大学・ISFSW-AP 会長）



基調講演の内容と感想

みやぎ県南中核病院 日本福祉大学大学院博士課程 大村 亜沙美

東京都立大学の和気純子先生をコーディネーター、国際ソーシャルワーク学校連盟会長アントワネット・ロンバード先生を講師に「ソーシャルワークと社会開発にむけたグローバル・アジェンダ ～包摂的な社会変容の共同構築～」をテーマに基調講演（逐語通訳あり）が行われた。ソーシャルワークと社会開発のためのグローバル・アジェンダは、「持続可能な開発のため 2030 アジェンダ」に沿ったものであり、これらを実現するためには「取り残された人々」や「最も取り残された人々」へのリーチアウトにおいて、彼らの包摂を促進するために、SDGs と各ターゲットと人権をリンクさせることが重要であり、持続可能な開発のための包摂的な社会変容の共同構築におけるソーシャルワークへの示唆として、ソーシャルワーク教育が焦点を当てるべき問題について講演を行っていただいた。

その後、日本社会事業大学・IFSW-AP 会長の小原眞知子先生にコメントをいただいた。わが国でグローバル・アジェンダを実現するために必要なこととして職能団体が連携し、啓発して取り組んでいくこと、ソーシャルワークの教育と人材養成についても触れられた。グローバル・アジェンダに対応するべく能力、国際ソーシャルワークに対応する力を身に着けるためには、貧困、不平等撲滅、修練化されたコミュニティをエンパワメントし、人権、社会正義を実現するためのカリキュラムが必要となることについてコメントをいただいた。

代表者コメントの後に、フロアとの質疑応答が行われ、活発な議論がなされた。その中の一つにグローバルな視点からみて日本の課題はどのようなものがあるかという質問があり、ロンバート先生より、「全国レベルで同じ認証試験を設定しているところが日本の強みだと思う。日本だけではないが、ソーシャルワークのコンセプトがきちんと整備されておらず、一定の社会に貢献するということが担保されていないことが課題ではないか」という示唆をいただいた。

私自身は医療ソーシャルワーカーとして実践を行っているが、現場の実践者として日本のみならず、世界で起きている社会問題に対し、どのように貢献していくことができるかを、考える機会となった。日本国内のソーシャルワーカーが今回の基調講演で示されたような国際ソーシャルワークに対応することができる知識や技術をどのように身に付け、実践していくことができるかを考え、行動していきたい。

3. 大会校企画シンポジウム

「多様性×包摂性とソーシャルワーク」

シンポジスト：

○ 加山 弾氏（東洋大学）

「地域共生社会づくりにおけるコミュニティソーシャル
ワーク機能：～重層性（制）を志向する支援体制とは～」

○ 小林 聖子氏（豊島区民社会福祉協議会）

「多様性×包摂性とソーシャルワーク～豊島区民社協の取組み～」

○ 瀧脇 憲氏（自立支援センターふるさとの会）

「関係性の生成変化：～居住・生活支援による包摂の可能性～」

○ 横田 千代子氏（女性自立支援施設いずみ寮）

「“売春防止法”から女性支援新法“困難な問題を抱える女性への支援に関する法律”へ：～支援の現場から思うこと～」

コーディネーター：

荒井 浩道氏（駒澤大学 学会理事 研究推進第1委員会）

コメンテーター：

○ 松永 実千代氏（東京精神保健福祉士協会）

○ アントワネット・ロンバード（国際ソーシャルワーク学校連盟）



岡山県立大学 口村 淳

大会企画シンポジウムは、地域共生社会における多様性と包摂性についてコミュニティソーシャルワーク（以下、CSW）の視点から切り込むものであった。最初の登壇者である加山氏は、重層的支援体制の背景や実践の法的根拠にふれ、制度が整備されるほどソーシャルワーカーは限定的な仕事をする傾向があると警鐘を鳴らした。その上で、CSW とはワーカーの裁量権・独立性を限定するものではなく、開発性（ひろがり）が重要であることを提唱された。小林氏の報告では、豊島区民社協の地域性を反映した取組み（例えば、コロナ禍の特例貸付における外国人世帯の多さとその支援）を通じて、公益性の高い事業を担う社協職員の実践課題として、CSW を「属人的」な実践から「標準化」していくことの必要性をあげられた。30 年以上にわたり東京・山谷地域で活動をしている瀧脇氏は、「鳥に向かって叫ぶ」（当事者にしかわからない世界があることの理解）、「今月で三回目ですよね」（たとえ警察に咎められても居場所のあることが大切）という印象的なフレーズを用い、CSW ではクライアントの異質性（heterogeneity）を損なわない配慮が必要であることに言及された。横田氏は今年4月に施行された「困難な問題を抱える女性への支援に関する法律」（女性支援新法）の経緯を読み解いた上で、女性自立支援施設の現場では個別支援だけではなく、社会とのつながり、心の回復支援、家族関係の調整といった「トータル」な実践が不可欠であると報告された。4 人のシンポジストの報告を受け、基調講演者のロンバード氏は、支援が必要な人に声をかけるだけではなく、「参加者」になるように促している点を評価された。また松永氏は3 人の実践者に共通する点として、現状に満足せず、ラディカル（革新的）に行動していることを高く評価された。当シンポジウムは、各シンポジスト、コメンテーターの意義深い発言で満たされており、地域共生社会におけるコミュニティソーシャルワークの方向性を示唆する充実した内容であった。最後に、登壇者の発言を取りまとめ、活発な議論が展開されたことは、コーディネーターの荒井氏の力量によるものと思った。

2 日目

4. 学会企画シンポジウム

文化的コンピテンスと SW ～国籍、 在留資格を超えて～

シンポジスト：

○ 武田 丈氏（関西学院大学）

「文化的コンピテンスに基づくソーシャルワークの実践モデル・アプローチ」

○ 杉山 聖子氏（入管収容問題を考えるソーシャルワーカーネットワーク）

「日本社会における外国人のメンタルヘルス ～収容と仮放免から考える～」

○ 南野 奈津子氏（東洋大学）

「移住家族と子どもの包摂をめぐる課題とソーシャルワーク」

○ 門 美由紀氏（横浜市国際交流協会）

「“避難民”の共通性と個別性 ～ソーシャルワークの視座から～」

コーディネーター：

ヴィラーク・ヴィクトル氏（日本社会事業大学、学会理事 研究推進第2委員会 / 国際委員会）

コメンテーター：

○ 岡野 範子氏（東京社会福祉士会）

○ 森 恭子氏（日本女子大学）



同志社大学大学院博士後期課程 黄 慧娟

このシンポジウムでは、大会の主テーマ「多様性と包摂性」における文化等の多様性に焦点を当て、日本で正規の在留資格を得にくい非正規滞在者が抱えている様々な課題を取り上げた。それらの課題に対応するには、現場の支援者に文化的コンピテンス（多様な文化に対応できる実践力）が求められるようになっている。本シンポジウムは、こうした文化的コンピテンスを基盤とするソーシャルワークのあり方について、以

下のような構成に沿って展開した。

報告①では、武田丈氏が文化的コンピテンスの概念の捉え方及びその歴史の変遷を整理し、文化的コンピテンスに基づくSWの実践アプローチや研究方法について説明した。報告②では、杉山聖子氏が日本に在住する外国人に対する収容と仮放免の問題から、外国人のメンタルヘルスの課題を取り上げ、ソーシャルワーカーが果たすべき役割を明示した。報告③では、南野奈津子氏が貧困、教育、非行、社会的養育、非正規滞在の側面から、移住家族と子どもの包摂をめぐる課題を取り上げ、今後期待される外国人支援の取り組みを提示した。報告④では、門美由紀氏が横浜市の国際政策及び多文化共生の推進に関する具体的な活動と取り組みを詳しく紹介し、文化的コンピテンスのあるソーシャルワークのあり方を検討した。

以上のように、4名の報告者がそれぞれの視点から文化的コンピテンスに基づくソーシャルワークの展開の仕方を模索した。報告終了後に、コメンテーターである岡野範子氏と森恭子氏がそれぞれの報告に対する感想を述べ、分野横断的な展開や人材育成のあり方などについて質問をし、充実したディスカッションを行った。何よりも当事者である彼らの声に寄り添う姿勢が大事であることを最後にコーディネーターのVirág Viktor氏がまとめた。

このシンポジウムを通して、今日在日外国人がいかに深刻な生活の困難を抱えているのかを痛感した。介護分野においても、人手不足を緩和する対策として、4つの外国人介護人材の受け入れ制度(EPA、在留資格『介護』、技能実習、特定技能)が2008年から相次ぎ創設された。ところが言語や文化などの違いにより、外国人職員は介護の現場で疎外感を感じており、「単純な労働力の補充」としか見なされていないことが多いと指摘されてきた。そのため、多文化共生社会を構築するには、日本社会に受け入れた外国人をただの「労働力」ではなく、「人」であることを認識することが重要であると考えます。

5. 自由研究報告

第1分科会

上智大学総合人間科学部 安井 優子

はじめに、第41回大会日本ソーシャルワーク学会で、研究成果を報告できる機会を与えて頂いたことに心から感謝申し上げます。

第1分科会では、私を含め、3名の報告者による研究発表がありました。会場の教室には予想を超える多くの参加者がお集まり下さり、熱心に耳を傾けて下さいました。

発表内容としては、それぞれ、混合研究法により医療ソーシャルワーカーのSpiritual Sensitivityについて検証した研究や、ソーシャルワーク実践において重要なEvidence Based Practiceのプロセスをテーマとした研究、また再犯防止推進施策における支援のもつ課題をソーシャルワークの視点から問う研究報告が行われ、各発表に対し活発な質疑応答が行われました。

私個人の感想といたしましては、今回自身が発表した医療ソーシャルワーカーのSpiritual Sensitivityの研究は、コロナ禍のなか、何度もくじけそうになりながらも地道に取り組んできた研究であり、全国の医療ソーシャルワーカーの皆様の御協力に支えられ、ようやく形としてまとめることのできた研究でした。今回はコロナ禍でのオンライン発表以来、久しぶりに対面で発表を行わせて頂ける貴重な機会となりました。会場の熱気を肌で感じながら、対面ならではの緊張感、興奮を味わい、その余韻に浸りながら帰路に着きました。

質疑応答や発表終了後に、直接、実践家の皆様から御声かけ頂き、研究成果に対する御意見や御感想を賜うことができたことは、自身にとって何より大きな励みとなりました。研究者として何か少しでも研究成果を現場に還元させて頂けることの喜びをあらためて実感させて頂くことができました。また研究者・教育者

として大先輩にあたる先生からも、直接、今後の研究の方向性や可能性について、貴重な御助言を賜り、新たな目標が与えられました。研究に対するモチベーションを大きく高めて頂くことができました。この場をお借りして、このような貴重な機会を与えて下さいました会員の皆様に心より深く感謝と御礼を申し上げます。

Spiritually-Sensitive-Social Work 実践の発展に向けて、さらなる精進を重ね、真理を探究し続けて参りたいと思います。今後とも御指導、御助言の程、どうぞよろしくお願い申し上げます。

第2分科会

三島北地区地域包括支援センター 齊藤 都子

第2分科会は、高齢者福祉と地域福祉の研究テーマから構成されました。①独立型社会福祉士によるコーディネート活動、②短期入所生活介護（ショートステイ）の生活相談員による業務と実態、③地域包括支援センター職員による虐待予防、による3つの研究発表が行われました。

弘前学院大学 小川幸裕先生による「独立型社会福祉士によるコーディネート活動の構造と関連要因」の研究は、コーディネート活動において、関連機関との調整に時間を要し、報酬につながりにくい実態を明らかにしました。

結果から、コーディネート活動は「住民支援活動」、「アドボカシー活動」、「専門職支援活動」、「行政支援活動」の4概念で構成され、アドボカシー活動を基盤に住民、専門職、行政担当者のエンパワメントを通じてコーディネート活動が取り組まれていると示されました。さらに、活動を支援する関連要因として「年齢」「年収」「名簿登録」があり、経済的安定と活動するうえで質の担保が重要な要因であると示されました。

独立型社会福祉士は、全国で402人（2024.7.16）が名簿登録しています。独立型だからこそできる活動の一つに、コーディネート活動があると考えます。今回の研究結果をもとに、次世代に引き継ぐためにもコーディネート活動の価値が相応な対価につながることを期待します。

岡山県立大学 口村淳先生による「ショートステイ生活相談員の予約業務および稼働率管理の実態」の研究は、ショートステイ生活相談員のサポート体制を見直すために提言できる結果でした。

私自身もショートステイで介護職として勤務していました。そのときの生活相談員は、結果にも示された「法人からノルマ」、「現場スタッフと管理者の板挟み」で精神的に追い込まれバーンアウトし、退職しました。

会場では、現役の生活相談員さんたちから「是非、この研究結果を全国に伝えてほしいです。」と共感の声がありました。この研究結果をもとに生活相談員のしんどさを知ってほしい思いと、組織を改革したいという意欲につながったと思います。一方では、「多職種の連携と対人援助について、組織に所属する相談員にも教育してほしい。」と切望する意見がありました。法人が売り上げ重視であっても、ソーシャルワークを忘れないで実践してほしいという意味が込められていたのではないのでしょうか。

私が働いていた20年前の現場と何も変わっていない実態であると感じつつ、生活相談員の役割や業務内容を組織内で理解されるためには、場づくりと今回の研究結果からの提言は有益であると考えます。

最後に、はじめての研究発表をさせていただいた齊藤です。今回は日本福祉大学大学院において、修論テーマ「地域包括支援センターにおける虐待予防—効果的なアプローチと予防的支援」を発表しました。この研究では、1.5次予防という新しい枠組みを示し、虐待が一度も起こっていない状態で、エキスパートの直感による虐待の兆候を明らかにすることにより、予防的支援モデルを提言しました。エキスパートたちが特に目を凝らして見ていたものは、家族システムの内実に迫るものでした。さらに「支援者に見抜かれないように演じる本人と介護者」を虐待発見前の変化として捉えていました。今後、論文投稿を目指すと同時に、虐待の予防的支援モデルとして一石を投じたいです。

第3分科会

川崎医療福祉大学 植田 嘉好子

本分科会では3件の口頭発表及びディスカッションが行われた。第1発表は「『ソーシャルワーカー向け現象学研究ワークショップ』の方法－アクションリサーチによる研修モデル構築に向けて－」（植田嘉好子：川崎医療福祉大学）である。現場実践者であるソーシャルワーカーが現象学的研究の方法を身に付けるためのワークショップの構成案並びに、その効果を検証するアクションリサーチの課題について報告された。現象学の方法そのものに対する質問が会場から複数出され、研究法としての特徴や意義が活発に議論された。

第2発表は、「AOP（Anti-Oppressive Practice）の理念に基づいた就労移行支援事業所における実践－障害者雇用を取り巻く社会的抑圧に対するソーシャルアクションに関する研究－」（鈴木美乃里：株式会社LITALICO パートナース）である。就労移行支援の利用者、支援者、企業側それぞれに対して、AOPの考え方に基づくワークショップやイベント等を実践し、参加者からのアンケート記述をSCATにて分析したものである。これらのアクションにより、抑圧による潜在的な認識や行為を参加者自身が自覚化し、従来のように企業や社会の側に合わせるのではなく、利用者本人を中心とした障害者雇用へと変化させる可能性を示した。

第3発表は、「主任相談支援専門員による相談支援専門員の人材育成に関する研究－地域課題解決に向けた相模原モデルの相談支援専門員研修実施から－」（小林麻衣子・北澤和美：社会福祉法人相模原市社会福祉事業団）である。「地域課題整理シート（改訂版）」を用いたグループスーパービジョンに参加した相談支援専門員によるアンケートを分析し、学びの経験を概念として抽出したものである。その結果、個別課題から出発し、ミクロ、メゾ、マクロの各実践を網羅したソーシャルワーク業務として展開することを見通すことによって、地域課題を解決する実践力を身に付けていく可能性を示唆した。

本分科会で報告された研究の共通点として、研修やワークショップを通して新たな知識や枠組みを提供し、関わる人々と対話を重ね、固定化された認識を変容・転換させることによって、よりよい支援や実践を目指す方向性が挙げられた。専門職だけでなく、当事者や社会の側も巻き込み、アクションを起こしていく重要性とともに、そのプロセスや効果を綿密に検証していくことも、今後の研究上の課題として求められていくだろう。

第4分科会

関西学院大学 安藤 幸

私は、2日目に行われた自由研究発表第4分科会に発表者として参加した。司会は川島ゆり子氏（日本福祉大学）が務め、私を含めて発表者は3名、出席者は約30名であった。

まず、岸本尚大氏（東京都立大学）は、外国人支援に関わる社協職員の文化的コンピテンスについて、文献研究から得られた知見をもとに、今後の尺度開発の可能性を示した。これまでの外国人支援はボランティアセクターに委ねられている場合が多かったが、生活福祉貸付金の窓口である社協では、コロナ禍に地域の外国人住民と接する機会が増え、あらためて文化的コンピテンスについて問われることになったという。ソーシャルワーク専門職に求められるのは、外国人住民も地域の一員であるという認識を持つことであり、そして、積極的につながりを作ること、関わり続けることである。

次に、本報告者が、地域で介護福祉を学ぶ外国人生徒の地域理解を促進するために行なったフォトボイス実践を紹介した。この取組により、外国人生徒の視点と地域住民の視点を交差させることになり、このことがお互いのエンパワメントにつながるとした。この相互関係性こそが、地域共生社会の実現に必要であり、

ソーシャルワークが関わることのできる接点であると考えられる。出席者からは、フォトボイス作品の質的分析方法などについて批評があり、今後の課題として検討していくこととした。

最後に、黄慧娟氏（同志社大学）が、中国の3つの地域で行なったソーシャルワーカーへのグループインタビューの分析から、中国のソーシャルワーカーが抱える援助関係や援助過程における葛藤を明らかにした。クライアントの文化的背景や価値観が、ソーシャルワーク実践に及ぼす影響は大きく、標準化されたソーシャルワークの実践の難しさが浮き彫りになった。広大な土地を有し、都市部と農村部では文化も生活様式も大きく異なる中国における、「中国型」のソーシャルワークとはどのようなものかを考えるきっかけになった。

出席者からは、それぞれの発表者に対して意見が投げかけられ、活発な議論が交わされた。ソーシャルワーク専門職のグローバル定義にある、「各国および世界の各地域で展開してもよい」汎用的な実践について、今後さらなる研究が必要であると感じた。

第5分科会

明治学院大学 宮崎 理

自由研究発表第5分科会では、筆者も含めて3名の会員による発表が行われた。まず、東京工業大学大学院の章琦会員が「ソーシャルワーカーの政治参加に関する文献研究：欧米諸国ソーシャルワーカーを中心に」という表題で発表を行った。章会員は、欧米諸国のソーシャルワーカーがどのように政治活動に関わっているかについて文献調査を通じて分析し、その特徴や影響要因を明らかにした。

次に、バルドスタ州立大学の菅野花恵会員が「アメリカのソーシャルワーカーが経験するクライアントバイオレンス：安全な職場環境を構築するために」という表題で発表を行った。菅野会員の研究は、アメリカ合衆国のソーシャルワーカーが職務中に直面するクライアントからの暴力について調査し、安全な職場環境を築くための具体的な対策を提案するものであった。

最後に、筆者が「ソーシャルワークにおける『インターセクショナリティ』（交差性）概念の再考：在日朝鮮人女性の活動からの示唆」という表題で発表を行った。この発表では、在日朝鮮人女性にとってインターセクショナルな抑圧に立ち向かうことがどのような経験であるのかに焦点を当て、フェミニスト・スタンドポイント理論を用いて考察した。それによって、インターセクショナリティ概念がソーシャルワークの知のありように変革を迫るものであることを示した。

これらの発表は、分野・領域が異なるものの、いずれも学際的かつ国際的な視野を持って取り組まれた研究の成果である。参加者からは多くの質問が寄せられ、活発な議論が展開された。学会で口頭発表することは、今後の研究に向けた新たな示唆を得るとともに、自身の研究がソーシャルワーク研究全体の中でどのような位置にあるのかを確認する機会を持つということである。そうした機会を通じて、研究者同士の交流が広がり、ソーシャルワーク研究がより一層活性化することが期待される。

6. 情報交換会

情報交換会報告

ルーテル学院大学 浅野 貴博

大会1日目の自由研究発表の終了後、大学の国際交流会館を会場に情報交換会が催された。本学会の空閑浩人副会長による開会のご挨拶の後、4月に開催されたIASSW/ICSW/IFSW ソーシャルワーク・教育・開発世界合同パナマ会議にて Katherine Kendall 賞を受賞された秋元樹先生（淑徳大学アジア国際社会福祉研

究所名誉所長)の乾杯の音頭で情報交換会が始まった。基調講演をされたアントワネット・ロンバード IASSW 会長も参加された。

オンラインでの大会開催を余儀なくされたコロナ禍を経て、今回の第 41 回大会は従来型の全面対面での開催となったが、大会の様々な面に対面ならではの良さを感じることができた。コロナ禍において一気に広がった、学会や各種セミナー等のオンライン開催は、場所を選ばず、移動のための時間やコストがかからないため非常に便利で、多くの人に様々な学びの機会を提供しており、私もその恩恵を受けている。その一方で、オンライン開催では得ることが難しいことのひとつとして、(ブレイクアウトルーム等の様々な工夫はあれど)参加者同士の直接の交わりがあると思う。オンラインの場合は、“本編”のセミナー等の終了とともに退出となるため、本編後に質問したり、言葉を交わしたいと思ってもかなわないが、本編後の“余白”がある対面の場合には、そうしたことに加え、名刺交換等もできる。語弊があるかもしれないが、情報交換会は本編後の余白の最たる例ではないかと思う。情報交換会に参加しなくても本編には特段関係ないが、私は、なかなか直接にお会いする機会がない旧知の先生方と久しぶりにゆっくりとお話することができ、また、新たな出会いもあり、楽しく有意義な時間を過ごすことができた。私事で恐縮であるが、ルーテル学院大学が次年度以降の学生募集停止を決定したことを受けて、旧知の先生方が色々と気にかけてくださり、先生方との意見交換を通して私自身の中にあるモヤモヤを吐き出すことができたことはとてもありがたく、対面ならではの貴重な時間となった。

ここまで対面ならではの良さについて述べてきたが、一方で、コスパ(コストパフォーマンス)を重視する視点からは、情報交換会の会費(¥5,000)を払ってまで元が取れるのか?という疑問はあるかもしれない。「元は取れる」と断言したいところではあるが、大会参加費とは違い、研究費とは認められないことを考えると、「少し高いな」と思うってしまう自身のコスパ思考を否定できないことを付言して報告を終えたい。

最後に、本大会の開催にあたりご尽力頂いた関係者各位に心より感謝申し上げたい。

Ⅲ．「2024 年度第2回理事会」報告

○日時：2024 年 6 月 23 日（日）18 時～20 時 Zoom によるオンライン会議

○出席・欠席者一覧

役職	氏 名	所 属	出欠
会 長	小山 隆	同志社大学	出
副会長	久保 美紀	明治学院大学	出
	和気 純子	東京都立大学	出
	大島 巖	東北福祉大学	出
	空閑 浩人	同志社大学	出
理 事	池田 雅子	北星学園大学	出
	大谷 京子	日本福祉大学	出
	木村 容子	日本社会事業大学	出
	横山登志子	札幌学院大学	出
	志水 幸	北海道医療大学	委任状
	川島ゆり子	日本福祉大学	出
	荒井 浩道	駒澤大学	出
	岡田 まり	立命館大学	委任状
	佐藤 俊一	NPO 法人スピリチュアルケア研究会ちば	出
	白川 充	仙台白百合女子大学	委任状
	杉野 聖子	江戸川学園おおたかの森専門学校	遅
	保正 友子	日本福祉大学	出
	ヴィレーグ・ヴィクトル	日本社会事業大学	出
監 事	黒木 保博	長野大学	出
	福山 和女	ルーテル学院大学	出
庶 務	小野セレスタ摩耶	同志社大学	出

* 次期理事就任予定者：渡辺裕一（武蔵野大学）出席

1. 2024 年度会員研究奨励費審査結果について

第 1 委員会より審査結果の報告と採択者の提案があり、提案通り承認された。総会で報告予定。

2. 第 41 回大会（6 月 29 日（土）、30 日（日））について

第 41 回大会について、担当の和気副会長より報告があった。6 月 22 日時点での参加申込者は約 120 名で、懇親会は 40 名程度の参加見込み、詳細な大会プログラムはすでに学会ホームページに掲載済みである旨の報告があった。当日の台風等が発生した際の対応について協議を行った。

3. 2024 年度総会（6 月 30 日開催）資料（案）について

2024 年度の総会資料（案）について、総務担当の空閑副会長より説明・提案があった。合わせて、各委員会委員長より補足の説明や報告があった。また、当日の総会運営等についての協議を行った。

4. 会員の動向（前回理事会 2024 年 5 月 21 日～6 月 21 日）

新たに以下の 3 名の入会について、承認された。この間の退会者はなしであった。

	会員種別	氏 名	所 属	備 考
1	正会員	寺田千栄子	北九州市立大学	2024 年度入会
2	正会員	杉本 一美	社会福祉法人 名古屋市社会福祉協議会 昭和区西部地域包括支援センター	2024 年度入会
3	正会員	石原 明子	熊本大学 大学院 人文社会科学研究部	2024 年度入会

5. 次回（2024 年度第 3 回）の理事会日程について

次回理事会の日程および開催方法について、11 月中にオンライン開催で行う旨確認された。

6. その他

第 41 回大会期間中の入会申し込みや大会参加の事前キャンセルについて、確認や意見交換を行った。

IV. 「2024 年度総会」報告

2024 年度総会は、6 月 30 日（日）（13 時～14 時）に開催されました。総会議長の福富昌城会員（花園大学）による進行のもと、提案された以下の議案について、すべて承認されました。

I. 議案

議案〔1〕 2023 年度活動報告（案）

1. 2023 年度各委員会活動報告

（1）研究推進第 1 委員会（※は役員以外の委員）

委員長：久保美紀（副会長）

委 員：荒井浩道 大谷京子 岡田まり 福山和女 木村容子 川島ゆり子

- ・学会誌編集委員会 ◎大谷京子 岡田まり 木村容子 荒井浩道（※梅崎薫 ※倉持香苗）
- ・学会賞選考委員会 川島ゆり子 小山隆 久保美紀（※木村真理子 ※奥村賢一 ※高良麻子）
- ・研究奨励委員会 岡田まり

○学会誌編集委員会

- ・第 46 号を 2023 年 6 月に発刊した。（論文 1 本、グッドプラクティショナー 1 本、書評 1 本を掲載）
- ・第 47 号を 2023 年 12 月に発刊した。（論文 2 本、グッドプラクティショナー 1 本、書評リプライ 1 本を掲載）
- ・第 48 号（2023 年 12 月末投稿締切、2024 年 6 月発刊）の査読等を行った。
- ・査読過程のより一層の円滑化を図るために、「査読ガイドライン」の修正を行った。

○学会賞選考委員会

- ・2023 年度の学会賞は、選考の結果いずれの賞（学術賞、学術奨励賞）も該当者なしとなった。
- ・2024 年度の選考に向けて、会員からの推薦（2024 年 1 月末日締切）を含めて選考作業を行った。

○研究奨励委員会

- ・会員研究奨励費について（2023 年 5 月末日締切）は、同年 6 月末日まで申請期間を延長したが、申請がなかった。
- ・2024 年度の会員研究奨励費の募集を MM、HP などで行った。（応募締切は 2024 年 5 月末日）

(2) 研究推進第2委員会

委員長：和気純子（副会長）

委員：荒井浩道 ヴィクトル・ヴィラーグ 志水幸 白川充 杉野聖子 横山登志子

1) 大会企画

① 2023 年度第 40 回大会の開催

以下のとおり第 40 回大会を開催した。約 200 名の参加があった。

大会日時：2023 年 7 月 8 日（土）・9 日（日）

大会テーマ：「実践現場からの情報発信と実践研究～震災復興支援の経験を踏まえて」

実行体制

○主催大会校・主催団体：学校法人梅檀学園東北福祉大学

○共催団体：

・【宮城県】（一社）宮城県社会福祉士会、（一社）宮城県精神保健福祉士協会、
宮城県医療ソーシャルワーカー協会、宮城県社会福祉法人経営者協議会

・【全国団体】（公社）日本社会福祉士会、（公社）日本精神保健福祉士協会、
（公社）日本医療ソーシャルワーカー協会、（特非）日本ソーシャルワーカー協会

○大会長：東北福祉大学学長 千葉 公慈

○実行委員長：田中尚（東北福祉大学教授）

○事務局長：石附敬（東北福祉大学准教授）

○開催方法：対面とオンライン（Zoom）のハイブリッド形式（自由研究報告は対面会場のみ）

○プログラム

【1 日目：7 月 8 日（土）】

・ 10：00～10：30 開会式（学会長、大会長挨拶）

・ 10：30～11：45 基調講演および共催団体のご紹介・レスポンス

基調講演「実践現場からの情報発信と実践研究」大島巖・竹之内章代（東北福祉大学）

指定発言：野口百香氏（日本医療ソーシャルワーカー協会会長／日本ソーシャルワーカー連盟会長）、
折腹実己子氏（宮城県社会福祉士会会長）

・ 12：45～15：15 大会校企画シンポジウム

「実践現場からの情報発信と実践研究～震災復興支援の経験を踏まえた実践と研究の循環可能性～」

○シンポジスト：大橋雄介氏（NPO 法人アスイク）

田中伸弥氏（（社福）ライフの学校）、真壁さおり氏（（一社）宮城県社会福祉士会）

○基調講演者コメント「情報発信と実践研究の可能性」について発題

○指定発言者：田村綾子氏（日本精神保健福祉士協会会長）

庄子清典氏（宮城県社会福祉法人経営者協議会会長）

・ 15：30～18：00 課題セッション①

「震災復興支援におけるソーシャルワーク

○パネリスト：西澤英之氏（宮城県社会福祉士会）

三品竜浩氏（宮城県精神保健福祉士協会）

福井康江氏（日本医療ソーシャルワーカー協会）

野田 毅氏（宮城県社会福祉協議会経営者協議会）

○コーディネーター：田中尚（東北福祉大学）、芳賀恭司（東北福祉大学）

・ 15：30～18：00 自由研究発表（第 1、第 2、第 3 分科会）

・18:30～20:00 情報交換会

【2日目:7月9日(日)】

・9:30～12:30 第40回大会記念企画「座談会:学会創立50周年を展望する」

○第1部:日本ソーシャルワーク学会の沿革と活動と今後の展望

小山隆会長、久保美紀副会長、和気純子副会長、大島巖副会長、空閑浩人副会長

○第2部・指定討論者の発題(学会活動の評価と要望)

西島善久氏(日本社会福祉士会会長)

小原真知子氏(日本医療ソーシャルワーカー協会副会長、国際ソーシャルワーカー連盟アジア太平洋地域
(IFSW-AP)会長)

ヴィラーク ヴィクトル(日本社会事業大)、大谷京子(日本福祉大)

・12:00～13:00 総会

・13:00～15:30 課題セッション②

「実践家の研究を支援する試み—本学会ワークショップのこれまでの成果と課題」

コーディネーター:佐藤俊一氏(スピリチュアルケア研究会ちば)

司会:保正友子(日本福祉大)

・13:00～15:30 自由研究発表(第4、第5分科会)

・15:30～16:00 クロージング

②2024年度第41回大会について、以下の通り会場や日程の調整、テーマ等の検討を行った。

2024年度第41回大会(東京大会)

期日:2024年6月29日(土)～30日(日) 会場:東京都立大学

実行委員長:和気純子(東京都立大学) 開催形式:対面開催

テーマ:「多様性×包摂性～誰一人取り残さないソーシャルワーク～」

2) 研究集会企画

以下の通り、研究セミナーを開催した。

テーマ「ジェンダーをめぐるソーシャルワークの課題:政策動向と支援課題」

開催日:2024年3月9日(土) 13:00-16:30 開催場所:明治学院大学(対面開催) 参加費:無料

参加者数:90名(申込)、当日参加は60名

内容

○開会の挨拶と趣旨説明 横山登志子(札幌学院大学・本学会理事)

○基調講演 大嶋栄子氏((NPO)法人リカバリー代表)

「わたしたちのなかにあるジェンダー規範の困難にソーシャルワークはどう向き合うのか」

○シンポジウム「ジェンダーをめぐるソーシャルワークの課題:政策動向と支援課題」

・発題者①「困難女性支援法のポイントと支援課題」湯澤直美(立教大学)

・発題者②「LGBT理解増進法のポイントと支援課題」神谷悠一氏(LGBT法連合会事務局長)

・発題者③「刑法改正のポイントと支援課題」後藤弘子氏(千葉大学)

・コメンテーター「3人の提言をうけてソーシャルワークの支援課題を考えるための論点」

宮崎理氏(明治学院大学)

○ディスカッション

○閉会の挨拶 久保美紀氏(副会長)

3) 共同研究

以下の通り、研究会を開催して、共同研究に取り組んだ。

1 共同研究課題名

「多様性と文化的コンピテンスにもとづくソーシャルワークのあり方に関する研究」

2 研究目的

グローバル化や世界各地における内戦や戦争の頻発により、日本においても在留外国人が増加し、多文化共生社会の構築が求められている。文化には、国籍や民族性のみならず、性別、性的指向、障がい、年齢、宗教など多様な次元が含まれ、多文化共生社会の実現を図るソーシャルワークは、このような文化の多様性や差異のアイデンティティへの影響と、それらに起因する抑圧や差別のメカニズムの理解と対応を必要とする。本研究は、このような視点から、多様性や文化的コンピテンスに関わるソーシャルワークに関して、グローバルな視点から先行研究の検討を行うとともに、日本におけるニーズと実践の現状を明らかにし、求められるソーシャルワークのあり方を追究することを目的とする。

3 研究会体制

理事：和気純子 横山登志子 ヴィクトル・ヴィラーク 大谷京子

会員：大嶋栄子 大和三重 加藤慶 添田正輝 武田丈 松尾加奈 松岡克尚 宮崎理

オブザーバー：荻野剛史 東田全央

4 研究会の開催（2023 年度分）

- ・2023 年 5 月 21 日 発題者 松岡克尚、宮崎理
- ・2023 年 8 月 6 日 発題者 ヴィクトル・ヴィラーク、加藤慶

5 その他

- ・研究会では、NASW の「SW 実践における文化的コンピテンスの基準と指標」（仮訳）について用語や訳語等について検討を行った。
- ・研究会成果物の作成や出版にむけて検討を行った。

(3) 研究推進第 3 委員会（＊は役員以外の委員）

委員長：大島 巖（副会長）

委 員：池田雅子 木村容子 佐藤俊一 白川 充 保正友子 川島ゆり子 小野セレストア摩耶

（＊浅野貴博 ＊野村裕美 ）

- ・出版、教材開発班：保正友子 池田雅子 佐藤俊一 白川 充 大島巖（＊浅野貴博）
- ・社会貢献推進班：大島巖 木村容子 川島ゆり子 小野セレストア摩耶（＊浅野貴博＊野村裕美）

○出版・教材開発班

①「実践研究支援ワークショップ」を以下の通り開催した

- ・開催日時（それぞれの午後の時間帯に開催した）

〔1 日目〕2023 年 9 月 24 日（日）〔2 日目〕2023 年 10 月 22 日（日）〔3 日目〕2023 年 11 月 19 日（日）
（2024 年 3 月 31 日（日）13：00～16：00 で、フォローアップ研修を行った。）

- ・参加登録者：28 名、最終日参加者：22 名
- ・実施方法：オンラインにより開催（Zoom）
- ・参加費：5,000 円

② 2024 年度のワークショップの企画について検討を行った。

○社会貢献推進班

①以下の通り、ソーシャルワーク・コラボセミナーを企画・開催した。

「ソーシャルワーク・コラボセミナー 2023 in 東京」

(日本ソーシャルワーク学会・東京都社会福祉協議会児童部会共同企画)

- ・ テーマ：「子どもアドボカシー」の課題と展望
- ・ 開催日時：2024 年 3 月 17 日（日）13:00 ～ 17:00
- ・ 開催場所：研究社英語センタービル大会議室と、Zoom 会議室のハイブリッド開催
- ・ 参加者：セミナー当日の参加者数は 117 名（対面参加者数 28 名・zoom アクセスレポートに基づくオンライン参加者数 89 名）
- ・ 主催：日本ソーシャルワーク学会、社会福祉法人東京都社会福祉協議会児童部会
- ・ 後援：（公社）日本社会福祉士会、（公社）日本精神保健福祉士協会、
（公社）日本医療ソーシャルワーカー協会、（特非）日本ソーシャルワーカー協会、
（一社）日本ソーシャルワーク教育学校連盟、（福）全国社会福祉協議会

② 2024 年度のソーシャルワーク・コラボセミナーについて検討を行った。

(4) 国際委員会

委員長：黒木保博

委 員：ヴィクトル・ヴィラグ 志水幸 （*浅野貴博 *松尾加奈）

下記の通り、「国際ソーシャルワーク研究セミナー」を開催した。

- ・ テーマ「カナダにおける先住民ソーシャルワークの歴史的発展と進化する実践モデル～社会政策と先住民固有の知に基づく精神保健福祉アプローチに焦点を当てて～」
- ・ 共催・後援
【共催】・国際ソーシャルワーク協会 ・日本ソーシャルワーク学会
【後援】・日本ソーシャルワーク教育学校連盟・日本ソーシャルワーカー連盟（4 団体）
- ・ 実施日時：2023 年 6 月 30 日（土）13 時～ 15 時 30 分（日本標準時間）
- ・ 実施場所等・オンライン（Zoom ウェビナー）& 日本女子大学目白キャンパス（120 年館 12009 教室）
- ・ 参加者人数：事前申込登録 366 人（うち日本 45%）
- ・ 当日アクセス・参加 200 人（うち日本 71%）（対面参加 17 人、オンライン参加 183 人）

(5) 研究倫理委員会（*は役員以外の委員）

委員長：久保美紀（副会長）

委 員：佐藤俊一（*稲垣美加子 *松倉真理子）

- ・ 会員に対して研究倫理にかかわる啓発に努めた。
- ・ 2023 年度は研究倫理上の問題は発生しなかった。
- ・ 「日本ソーシャルワーク学会研究倫理指針」の改定作業に取り組んだ。あわせて「日本ソーシャルワーク学会研究倫理規程」及び「日本ソーシャルワーク学会研究倫理委員会規程」の制定を行った。

(6) 総務委員会

委員長：空閑浩人（副会長）

委 員：池田雅子 杉野聖子 保正友子 横山登志子 小野セレストア摩耶

庶務担当：小野セレストア摩耶 委託業者 (株)ワールドプランニング

①日本ソーシャルワーク学会通信（ニュースレター）の発行

- ・第136号（2023年6月5日）、第137号（2023年12月22日）、第138号（2024年月3月31日）を発行した。

②学会メールマガジンの配信

- ・第114号（2022年4月）～第125号（2024年3月）の毎月の配信を行った
- ・臨時号「2023年度総会&第40回記念大会のお知らせ」（2023年6月）および「日本ソーシャルワーク学会2023年度役員選挙投票のお願い（2023年12月）」「日本社会福祉系学会連合加盟学会ご所属の会員向けアンケート調査協力をお願い」（2024年2月）の配信を行った。

③ホームページの運営管理

- ・大会、コラボ、セミナー等資料、ニュースレターのアップその他コンテンツの充実等に努めた。

④2023年度役員選挙の実施

- ・以下のスケジュールで学会役員選挙を実施した
 - 1) 2023年7月：選挙管理委員選出（7月9日総会報告）
新藤健太会員（日本社会事業大学）、根本貴子会員（佐久大学）、廣野俊輔会員（同志社大学）
 - 2) 2023年10月4日 第1回選挙管理委員会開催
 - 3) 2023年10月：会員調査の実施、選挙人・被選挙人名簿確定&投票システム設定等確認
 - 4) 2023年11月末：会員名簿、公示文書、投票実施要領、投票システム・ログイン情報の発送
 - 5) 2023年12月1日：公示（学会ホームページ）
 - 6) 2023年12月6日から20日まで：投票
- ・オンライン投票 12月6日（水）0時～12月20日（水）24時まで
- ・郵送投票 12月6日（水）～12月20日（水）必着
 - 7) 2023年12月25日：第2回選挙管理委員会の開催&開票
 - 8) 2024年1月14日：正副会長会議および理事会で報告
- ・当選理事承認および理事会推薦理事の協議
 - 9) その後、当選理事・推薦理事、当選監事就任の打診
 - 10) 2024年3月：学会ホームページ&ニュースレターで選挙結果の公示

⑤その他・庶務事項等

（株）ワールドプランニングへの業務委託について

- ・委託している業務内容
 - ①会員管理、②学会経費等の経理業務、③学会事務用品の管理、④学会事務運営
- ・2023年度分の会費入金率：96.6%
- ・2023年度分の会費請求（2月、7月、11月の年3回請求）

2. 2023年度理事会および正副会長会議開催報告

(1) 理事会開催報告

第1回：2023年5月21日（日）17時～20時（＊web会議）

〔内容〕2023年度委員会体制の確認、各委員会活動報告&計画、会員の異動ほか

第2回：2023年7月2日（土）17時～19時（＊web会議）

〔内容〕名誉会員の推挙、役員選挙関連、2023年度総会関連、会員の異動ほか

第3回：2023年11月26日（日）17時30分～19時（＊web会議）

〔内容〕各委員会活動報告&予定、会員の異動ほか

第4回：2024年1月14日（日）18時～19時30分（＊web会議）

〔内容〕役員選挙結果、各委員会活動報告&予定、会員の異動ほか

第5回：2024年3月9日（土）17時～18時30分（対面開催、於明治学院大学）

〔内容〕2024年度役員体制&委員会体制、各委員会活動報告&予定、会員の異動ほか

（2）正副会長会議開催報告

第1回：2023年5月14日（日）17時～18時30分（＊web会議）

第2回：2023年6月24日（土）18時～19時30分（＊web会議）

第3回：2023年11月26日（日）15時～17時（＊web会議）

第4回：2024年1月14日（日）16時～17時30分（＊web会議）

第5回：2024年3月3日（日）18時30分～20時（＊web会議）

3. 関連団体活動報告

（1）日本社会福祉系学会連合

・運営委員会等への参加

第1回運営委員会 2023年8月23日 第2回運営委員会 2023年12月27日

総会 2024年5月26日

また、2023年10月～11月に実施された「コロナ禍における学会活動に関する調査」に協力。

報告書が2024年5月に発刊された。

日本社会福祉系学会連合「コロナ禍における学会活動に関する調査報告書」（2024年5月）

corona-01-240523.pdf（wdc-jp.com）<http://jaswas.wdc-jp.com/pdf/corona-01-240523.pdf>

（2）人文社会科学系学協会男女共同参画推進連絡会（GEAHSS）

1) 通算第12回運営委員会（2023年9月23日）、通算第13回運営委員会（2024年3月27日）への参加

2) 第2回人文社会科学系研究者の男女共同参画実態調査（調査実施期間2023年8月18日（金）～10月15日（日））実施に伴い、本学会会員への調査協力依頼をメールマガジンにて行った。

なお、本調査結果報告書（単純集計・クロス集計）（2024年3月）は、下記に掲載。

https://5a0feff5-ad16-4b69-b4a6-5275d5dee97f.usrfiles.com/ugd/5a0fef_d85d4be9a0d94d89a1bf115735ba44a1.pdf

4. 2023年度会員異動報告

① 2023年度入会者 28名（正会員28名）

② 2022年度退会者 25名

③ 2023年3月31日現在の会員数

・総会員数 616名

・正会員610名 準会員4名 賛助会員2団体

議案〔2〕 2023年度 決算報告（案）・監査報告

1. 2023年度収支決算報告（24頁参照）

・一般会計の部

・特別会計①（学会賞） ・特別会計②（出版事業）

2. 2023 年度監査報告 [別紙資料 2]

2024 年 6 月 14 日（金）（13 時～ 14 時 30 分） 黒木保博監事、福山和女監事による監査が同志社大学新町キャンパスで行われ監査報告書が提出された。

議案〔3〕 2024 年度活動計画（案）

1. 2024 年度役員体制

役職	氏 名	理事・役員 任期	備 考
会 長	小山 隆	2022.7.2 ～ 2026 総会終了時	
副会長	空閑 浩人	2024.6.30 ～ 2028 総会終了時	研究推進第 1 委員会委員長／研究倫理委員会委員長
	和気 純子	2022.7.2 ～ 2026 総会終了時	研究推進第 2 委員会委員長
	大島 巖	2022.7.2 ～ 2026 総会終了時	研究推進第 3 委員会委員長
	保正 友子	2024.6.30 ～ 2028 総会終了時	総務委員会委員長
理 事	久保 美紀	2024.6.30 ～ 2028 総会終了時	研究推進第 1 委員会／研究倫理委員会
	岡田 まり	2024.6.30 ～ 2028 総会終了時	研究推進第 1 委員会
	木村 容子	2022.7.2 ～ 2026 総会終了時	研究推進第 1 委員会／第 3 委員会
	川島ゆり子	2022.7.2 ～ 2026 総会終了時	研究推進第 1 委員会／第 3 委員会
	荒井 浩道	2024.6.30 ～ 2028 総会終了時	研究推進第 1 委員会
	大谷 京子	2022.7.2 ～ 2026 総会終了時	研究推進第 2 委員会／総務委員会
	白川 充	2024.6.30 ～ 2028 総会終了時	研究推進第 2 委員会／第 3 委員会
	横山登志子	2022.7.2 ～ 2026 総会終了時	研究推進第 2 委員会／総務委員会
	ヴァイラーク・ヴィクトル	2024.6.30 ～ 2028 総会終了時	研究推進第 2 委員会／国際委員会
	志水 幸	2022.7.2 ～ 2026 総会終了時	研究推進第 2 委員会／国際委員会
	池田 雅子	2022.7.2 ～ 2026 総会終了時	研究推進第 3 委員会／総務委員会
	渡辺 裕一	2024.6.30 ～ 2028 総会終了時	研究推進第 3 委員会／総務委員会
	佐藤 俊一	2024.6.30 ～ 2028 総会終了時	研究推進第 3 委員会／研究倫理委員会
監 事	福山 和女	2024.6.30 ～ 2028 総会終了時	研究推進第 1 委員会
	黒木 保博	2022.7.2 ～ 2026 総会終了時	国際委員会委員長
庶務担当理事	小野セレストア摩耶	2022.7.2 ～ 2026 総会終了時	研究推進第 3 委員会／総務委員会

2. 2024 年度委員会体制（＊は役員以外の委員）

①研究推進第 1 委員会

委員長：空閑浩人（副会長）

委 員：荒井浩道 岡田まり 川島ゆり子 木村容子 久保美紀 福山和女
 ・学会誌編集委員会 荒井浩道（編集委員長） 岡田まり 木村容子 久保美紀
 （＊石附敬 ＊竹本与志人）
 ・学会賞選考委員会 川島ゆり子（担当理事） 空閑浩人 小山隆
 （＊木村真理子（委員長）＊奥村賢一 ＊高良麻子 ）
 ・研究奨励委員会 岡田まり（担当理事）

②研究推進第 2 委員会

委員長：和気純子（副会長）

委 員：ヴィラーク・ヴィクトル 大谷京子 志水幸 白川充 横山登志子（＊杉野聖子）

③研究推進第3委員会

委員長：大島 巖（副会長）

委 員：池田雅子 小野セレスタ摩耶 川島ゆり子 木村容子 佐藤俊一 白川 充 渡辺裕一
（＊浅野貴博 ＊野村裕美）

④国際委員会

委員長：黒木保博

委 員：ヴィラーク・ヴィクトル 志水幸 （＊浅野貴博 ＊松尾加奈）

⑤研究倫理委員会

委員長：空閑浩人（副会長）

委 員：久保美紀 佐藤俊一（＊松倉真理子 ＊稲垣美加子）

⑥総務委員会

委員長：保正友子（副会長）

委 員：池田雅子 小野セレスタ摩耶 大谷京子 横山登志子 渡辺裕一（＊越智あゆみ）

庶務担当：小野セレスタ摩耶

3. 2024 年度委員会活動計画

（1）研究推進第1委員会

1. 学会誌編集委員会

- ①学会誌第48号・49号を学会ホームページ上に電子ジャーナルとして発行する。あわせて、J-stage、EBSCOhostにも掲載する。
- ②編集委員の委嘱：編集委員の任期満了に伴い、新たに委員の委嘱を行う。
- ③査読委員の委嘱：査読委員の任期満了に伴い、新たに委員の委嘱を行う。
- ④会員の積極的投稿を促すとともに、学会誌の質の向上を図る。
- ⑤学会誌を通して、会員の研究成果をより広く社会に発信できるように努める。
- ⑥投稿規程・執筆要領・査読のあり方について継続的な検討を行う。

2. 学会賞選考委員会

- ①2024年度の学会賞は、選考の結果いずれの賞（学術賞、学術奨励賞）も該当者なしとなった。
- ②2025年度学会賞の選考を行う。

3. 研究奨励委員会

- ・会員の個人研究・共同研究の促進のため、2024年度会員研究奨励費の申請を受付、審査し、選考を行った。
- ・2024年度会員研究奨励費（（旧年度第1委員会による選考）について、申請受付、審査、選考を行い、下記の2名の申請を採択した。

- ①氏名：安然 所属：駒澤大学大学院 会員番号：1103

研究テーマ：「テキストマイニングによる不登校児童生徒の声の可視化—当事者の視点に基づいた支援方法の検討—」

- ②氏名：菱谷隆宏 所属：国際医療福祉大学大学院 会員番号：1108

研究テーマ：「退院支援過程における看護師と社会福祉士の強みに関する研究—両職種間での連携を深めるために—」

(2) 研究推進第2委員会

1. 2024年度研究セミナー企画について検討する。

2. 共同研究について

＊「多様性と文化的コンピテンスにもとづくソーシャルワークのあり方に関する研究」を進める。

文献作成について協議する。

＊公開研究会の予定 第4回研究会 2024年8月31日 発題者 和気純子氏 大和三重氏

第5回、6回研究会を開催予定（日程は未定）

＊公開研究会はオンラインにて会員等に公開

3. 2025年度第42回大会開催校（関西学院大学）の開催準備支援および2026年度第43回大会開催校の決定にむけて調整、打診を行う。

(3) 研究推進第3委員会

①出版・教材開発班

1) 実践研究支援ワークショップ

2024年度も2022-2023年度と同様に3回シリーズで実践研究支援ワークショップを開催する予定

具体的には、9月15日（日）、10月6日（日）、12月1日（日）午後にZoomで行う。当日は動画撮影を行う。今後のWSの発展方向性を検討する位置づけから、『ソーシャルワーカーのための研究ガイドブック』の販売促進、中央法規との協議を行う。

2) フォローアップ研修（これまでの受講生へのフォローアップ研修）

これまでの実践研究支援ワークショップの受講者を対象にして、研究の進捗状況を確認し、次の作業に向けたフォローアップを行う。

②社会貢献推進班

1) 2024年度コラボ企画：主担当：白川充委員、大島巖委員

コラボ先：山形県の社会福祉協議会（社協の先駆的事業など）

(1) 企画内容：山形県内における社会福祉協議会の歴史と、地域特性を踏まえたユニークな取り組みと課題（権利擁護関連、生活困窮者自立支援・日常生活自立支援関連、地域づくり等）を、今日のソーシャルワーク理論と実践課題という視点から捉え直し、社会福祉協議会におけるソーシャルワーク実践の枠組みと地域における包括的支援体制構築に関する課題について検討する。

(2) 日時：2025年2月23日（日）午後1時（3時間程度）

(3) 会場：山形テルサ（予定：2024年8月23日9時受付）

（定員：対面50～100名程度。ハイブリッド100～150名程度）

2) 2026年度コラボ企画：主担当：川島ゆり子委員

スクールソーシャルワーカーとコミュニティソーシャルワーカーの包括的支援体制における協働の可能性に関するテーマ（暫定案）を、愛知県スクールソーシャルワーク実践研究会と検討している。

(4) 国際委員会

○講師招聘と基調講演の実施

日程：2024年6月29日（土曜日）10：30～12：30

講師：アントワネット・ロンバード（Antoinette Lombard）

（国際ソーシャルワーク学校連盟次期会長予定者）

テーマ「ソーシャルワークと社会開発にむけたグローバル・アジェンダ

ー包摂的な社会変容の共同構築ー」(逐語通訳あり)

会場：東京都立大学 南大沢キャンパス (八王子市南大沢1-1)

◆日本ソーシャルワーク学会 2024 年第 41 回大会基調講演として実施

挨拶：黒木保博 (国際委員会・長野大学)

コーディネーター：和気純子 (東京都立大学)

コメンテーター：小原真知子 (日本社会事業大学・IFSW-AP 会長)

(5) 研究倫理委員会

- ①会員に対して研究倫理にかかわる啓発に努める。
- ②研究倫理上の問題への的確な対応を図る。

(6) 総務委員会

- ①メールマガジンを毎月発行予定
- ②フェイスブックなどの SNS を活用した情報発信に努める。
- ③ニュースレター (139 ～ 141 号) を発行予定
- ④ホームページの運営管理
 - ・大会、コラボ、セミナー等資料、ニュースレターのアップなどコンテンツや内容の充実に努める。
- ⑤会員拡大
 - ・学会紹介動画の更新を行い、会員拡大に向けて各所で放映する。
- ⑥その他庶務関係事項
 - ・業務の一部を(株)ワールドプランニングに委託しており、2024 年度も継続して委託する。
 - ・委託する業務内容：①会員管理②学会経費等の経理業務③学会事務用品の管理④学会事務運営

4. 2024 年度 第 41 回大会について

- ・大会テーマ「多様性×包摂性～誰一人取り残さないソーシャルワーク～」
- ・開催日時：2024 年 6 月 29 日 (土)、30 日 (日)
- ・開催場所：東京都立大学南大沢キャンパス (対面開催)

5. その他

- ・学会による出版事業のあり方について検討を進める

議案〔4〕 2024 年度 予算(案) (27 頁参照)

- ・一般会計の部
- ・特別会計① (学会賞)
- ・特別会計② (出版事業)

議案〔5〕 次回 (2025 年度・第 42 回) 大会について

- ・関西学院大学を会場として開催予定 (日程等は未定)
- ・総会終了後には、武田丈会員 (関西学院大学) からの挨拶があった。

II. 報告事項

1. 関係機関・団体からの寄贈資料、寄贈図書等

この 1 年間の本学会への寄贈資料や図書についての報告があった。

V.Ⅳに関連して 2023 年度決算および 2024 年度予算書

日本ソーシャルワーク学会 2023 年度決算書

2024 年 3 月 31 日

I. 一般会計

1. 収入

(単位：円)

項 目	2023 年度 予 算	2023 年度 決 算	差 異 (収入減 △)	備 考
1 年会費	4,800,000	4,918,000	118,000	正会員：613 件、準会員 2 件、賛助会員 2 件
2 入会金	150,000	115,000	△ 35,000	23 件
3 印税等	100,000	10,052	△ 89,948	著作権使用料
4 事業収入	50,000	152,299	102,299	コラボセミナー & 実践研究ワークショップ等参加費
5 雑収入	1,000	52	△ 948	銀行利息
6 寄付金等	0	551,929	551,929	2023 年度第 40 回大会事務局からの寄付金
収入小計	5,101,000	5,747,332	646,332	
前年度繰越金	7,534,340	7,534,340	-	
収入合計	12,635,340	13,281,672	-	

2. 支出

(単位：円)

項 目	2023 年度 予 算	2023 年度 決 算	差 異 (支出増 △)	備 考
(研究推進第 1 委員会活動費)				
1 学会誌発行費	500,000	280,500	219,500	編集・発行費 (第 46,47 号分)、英文校閲、執筆料
2 学会賞関連費	500,000	500,000	0	特別会計 (学術奨励賞/学会賞) へ繰入
3 会員研究奨励費	500,000	0	500,000	
(研究推進第 2 委員会活動費)				
4 大会関連費	500,000	500,000	0	第 41 回大会 (東京大会) 準備費
5 大会企画費	200,000	76,764	123,236	第 40 回大会講師謝金等
6 研究集会費	200,000	157,309	42,691	2023 年度研究セミナー企画・開催費
7 共同研究費	600,000	112,497	487,503	講師謝金・通訳費等
(研究推進第 3 委員会活動費)				
8 出版・教材開発費	300,000	0	300,000	
9 社会貢献推進費	400,000	341,109	58,891	「ソーシャルワークコラボセミナー 2023in 東京」企画・開催費
(国際委員会)				
10 国際委員会活動費	300,000	116,600	183,400	国際ソーシャルワーク研究セミナー通訳費、謝金等
(研究倫理委員会)				
11 研究倫理委員会活動費	80,000	0	80,000	
(広報・渉外)				
12 福祉系学会連絡協議会関連費	110,000	105,000	5,000	日本学術協力財団賛助会費、日本社会福祉系学会連合分 担金, GEHSS 会費
13 SCS 研究協議会関連費	110,000	100,000	10,000	SCS 研究協議会分担金
14 学会通信発行費	660,000	564,489	95,511	学会通信 (ニュースレター) 136 ~ 138 号発行・発送費
15 ホームページ等運営費	300,000	367,400	△ 67,400	ホームページ委託・管理費、メールマガジン管理費
16 会員拡大・体制整備費	50,000	0	50,000	
(学会運営費)				
17 『ソーシャルワーク研究』誌 編集委託費	250,000	220,000	30,000	『ソーシャルワーク研究』誌発行に伴う学会分担金
18 理事会費	300,000	83,760	216,240	対面理事会出席のための交通費等
19 正副会長会費	50,000	0	50,000	
20 事務局委託費	1,300,000	1,079,210	220,790	学会事務センター (ワールドプランニング) 委託費
21 事務局運営費	400,000	190,927	209,073	印刷・発送費、請求書・封筒作成費等
22 アーカイブ化推進費	300,000	366,080	△ 66,080	学会資料 (ニューズレター等) のデジタル化等関係費

23	役員選挙費	900,000	583,394	316,606	インターネット選挙システム利用費、会員名簿作成費等
(その他)					
24	振込手数料	20,000	48,390	△ 28,390	会費振込、講師謝金・旅費等振込に伴う手数料
25	出版準備積立	0	0	0	
26	予備費	100,000	11,000	89,000	大会・セミナー等参加申込用学会共通メアド作成費
支出小計		8,930,000	5,804,429	3,125,571	
次年度繰越金		3,705,340	7,477,243	-	
支出合計		12,635,340	13,281,672	-	

II. 特別会計① (学会賞)

1. 収入

(単位：円)

項 目		2023 年度 予 算	2023 年度 決 算	差 異 (収入減 △)	備 考
1	前年度からの繰越金	4,246,529	4,246,529	0	
2	一般会計からの繰入金	500,000	500,000	0	一般会計「学会賞関連費」より繰入
3	雑収入	0	36	36	利息
収入合計		4,746,529	4,746,565	36	

2. 支出

(単位：円)

項 目		2023 年度 予 算	2023 年度 決 算	差 異 (支出増 △)	備 考
1	学会賞副賞	300,000	0	300,000	
2	審査等関係費	500,000	63,470	436,530	書籍代等審査関係費用
3	その他	4,000	935	3,065	振込手数料
4	次年度への繰越金	3,942,529	4,682,160	△ 739,631	
支出合計		4,746,529	4,746,565	△ 36	

III. 特別会計② (出版事業)

1. 収入

項 目		2023 年度 予 算	2023 年度 決 算	差 異 (収入減 △)	備 考
1	前年度繰越金	24	24	0	
2	一般会計からの繰入金	0	0	0	
3	雑収入	0	0	0	
収入合計		24	24	0	

2. 支出

項 目		2023 年度 予 算	2023 年度 決 算	差 異 (支出増 △)	備 考
1	出版事業費	0	0	0	出版費
2	出版事業関連費	0	0	0	
3	その他	0	0	0	
4	次年度繰越金	24	24	0	振込手数料
支出合計		24	24	0	

日本ソーシャルワーク学会

2023年度 監査報告書

日本ソーシャルワーク学会の 2023 年度における実施事業ならびに会計収支決算について監査を実施しましたので、次のとおり監査結果を報告いたします。

1. 監査事項

日本ソーシャルワーク学会の 2023 年度における実施事業ならびに会計収支決算について

2. 監査報告

監査事項に関する必要書類を精査した結果、事業は計画に基づき適正に実施されていること、また、会計収支決算についても適正かつ正確に処理されていることを認めます。

2024年 6 月 14 日

日本ソーシャルワーク学会

監 事 里木 保博 

監 事 福 山 和 一 

日本ソーシャルワーク学会 2024 年度予算書

2024 年 6 月 30 日

I. 一般会計

1. 収入

(単位：円)

項 目	2024 年度 予 算	2023 年度 予 算	2023 年度 決 算	備 考
1 年会費	4,800,000	4,800,000	4,918,000	年会費収入（正会員 600 名分見込み）
2 入会金	150,000	150,000	115,000	入会金収入（新入会員 30 名分見込み）
3 印税等	100,000	100,000	10,052	印税・著作権使用料等
4 事業収入	100,000	50,000	152,299	研究セミナー参加費等
5 雑収入	1,000	1,000	52	銀行利息等
6 寄付金等	0	0	551,929	
収入小計	5,151,000	5,101,000	5,747,332	
前年度からの繰越金	7,477,243	7,534,340	7,534,340	2023 年度から 2024 年度への繰越金
収入合計	12,628,243	12,635,340	13,281,672	

2. 支出

(単位：円)

項 目	2024 年度 予 算	2023 年度 予 算	2023 年度 決 算	備 考
(研究推進第 1 委員会活動費)				
1 学会誌発行費	500,000	500,000	280,500	編集費（2 号分）、英文翻訳費等、J-STAGE 掲載費等
2 学会賞関連費	100,000	500,000	500,000	特別会計（学会賞）へ繰入 / 書籍購入等審査関係費
3 会員研究奨励費	500,000	500,000	0	会員への研究奨励費
(研究推進第 2 委員会活動費)				
4 大会関連費	500,000	500,000	500,000	大会準備費（次回〔2025 年度第 42 回〕大会開催校へ）
5 大会企画費	200,000	200,000	76,764	大会時の講演・シンポジウム謝金等関連費
6 研究集会費	200,000	200,000	157,309	研究集会（研究セミナー開催等）企画・開催費
7 共同研究費	600,000	600,000	112,497	共同研究費、旅費、会議費等（1 件 20 万円×3 件見込）
(研究推進第 3 委員会活動費)				
8 出版・教材開発費	300,000	300,000	0	旅費、会議費、実践研究ワークショップ等企画・開催費
9 社会貢献推進費	500,000	400,000	341,109	ソーシャルワーク・コラボセミナー企画・開催費
(国際委員会)				
10 国際委員会活動費	300,000	300,000	116,600	国際セミナー開催費、共催事業協賛金、旅費、会議費等
(研究倫理委員会)				
11 研究倫理委員会活動費	80,000	80,000	0	旅費、会議費等
(広報・渉外等関係費)				
12 福祉系学会連絡協議会等関連費	110,000	110,000	105,000	日本学術協力財団賛助会費、日本社会福祉系学会連合分担金、GEAHSS 会費
13 SCS 研究協議会関連費	110,000	110,000	100,000	SCS 研究協議会分担金
14 学会通信発行費	660,000	660,000	564,489	ニュースレター印刷・発行費、発送費（3 号分）
15 ホームページ等運営費	400,000	300,000	367,400	ホームページ・メールマガジン委託費・動画更新費等
16 会員拡大・体制整備費	50,000	50,000	0	広報関係費等
(学会運営費)				
17 『ソーシャルワーク研究』誌編集委託費	250,000	250,000	220,000	『ソーシャルワーク研究』誌発行に伴う経費等
18 理事会費	300,000	300,000	83,760	旅費、会議費等
19 正副会長会費	50,000	50,000	0	旅費、会議費等
20 事務局委託費	1,300,000	1,300,000	1,079,210	事務センター（(株) ワールド・プランニング）委託費
21 事務局運営費	400,000	400,000	190,927	印刷・発送費、請求書・封筒作成費等
22 アーカイブ化推進費	300,000	300,000	366,080	学会資料（ニューズレター等）のデジタル化等関係費
23 役員選挙費	0	900,000	583,394	会員調査・名簿作成、選挙システム整備費等
(その他)				
24 振込手数料	20,000	20,000	48,390	講師謝金、旅費、会費振込等に伴う手数料等
25 出版準備積立	0	0	0	
26 予備費	100,000	100,000	11,000	
支出小計	7,830,000	8,930,000	5,804,429	

次年度繰越金	4,798,243	3,705,340	7,477,243	2025 年度への繰越金
支出合計	12,628,243	12,635,340	13,281,672	

II. 特別会計（学会賞関連）

1. 収入

（単位：円）

項 目	2024 年度 予 算	2023 年度 予 算	2023 年度 決 算	備 考
1 前年度繰越金	4,682,160	4,246,529	4,246,529	2023 年度からの繰越金
2 一般会計からの繰入金	100,000	500,000	500,000	一般会計「学会賞関連費」より繰入
3 雑収入	0	0	36	利息
収入合計	4,782,160	4,746,529	4,746,565	

2. 支出

（単位：円）

項 目	2024 年度 予 算	2023 年度 予 算	2023 年度 決 算	備 考
1 学会賞副賞	300,000	300,000	0	学術賞、学術奨励賞副賞
2 審査等関係費	100,000	500,000	63,470	選考委員資料購入、会議費、賞状作成費等
3 その他	4,000	4,000	935	振込手数料等
4 次年度繰越金	4,378,160	3,942,529	4,682,160	2025 年度への繰越金
支出合計	4,782,160	4,746,529	4,746,565	

III. 特別会計（出版事業関連）

1. 収入

項 目	2024 年度 予 算	2023 年度 予 算	2023 年度 決 算	備 考
1 前年度繰越金	24	24	24	
2 一般会計からの繰入金	0	0	0	
3 雑収入	0	0	0	
収入合計	24	24	24	

2. 支出

項 目	2024 年度 予 算	2023 年度 予 算	2023 年度 決 算	備 考
1 出版事業費	0	0	0	
2 出版事業関連費	0	0	0	
3 その他	0	0	0	
4 次年度繰越金	24	24	24	
支出合計	24	24	24	

VI. 書籍 自著紹介

『ソーシャルワーカーのミライー混沌の中にそれでも希望の種を蒔く』

(荒井浩道・長沼葉月・後藤広史・木村淳也・本多勇・木下大生著, 生活書院, 2024 年)

駒澤大学 荒井 浩道 (学会理事 研究推進第 1 委員会)

本書は、6 名の執筆者がそれぞれの立場からソーシャルワーカーの「ミライ」を展望するものです。今日のソーシャルワーカーが置かれている困難な状況を踏まえながらも、「ゼツボウ」することなく、「ミライ」を描くことが目指されています。

そして本書は、「ソーシャルワーカーの〇〇」というシリーズの最後を締めくくるという役割も担っています。最初、『ソーシャルワーカーのジレンマ』（筒井書房、2009 年）が刊行されました。その後、執筆者が入れ替わり、本書と同じ体制で執筆した『ソーシャルワーカーのジリツ』（生活書院、2015 年）、『ソーシャルワーカーのソダチ』（生活書院、2017 年）が刊行されています。そして、少し時間が経過し、本書『ソーシャルワーカーのミライ』（生活書院、2024 年）が刊行されることになります。

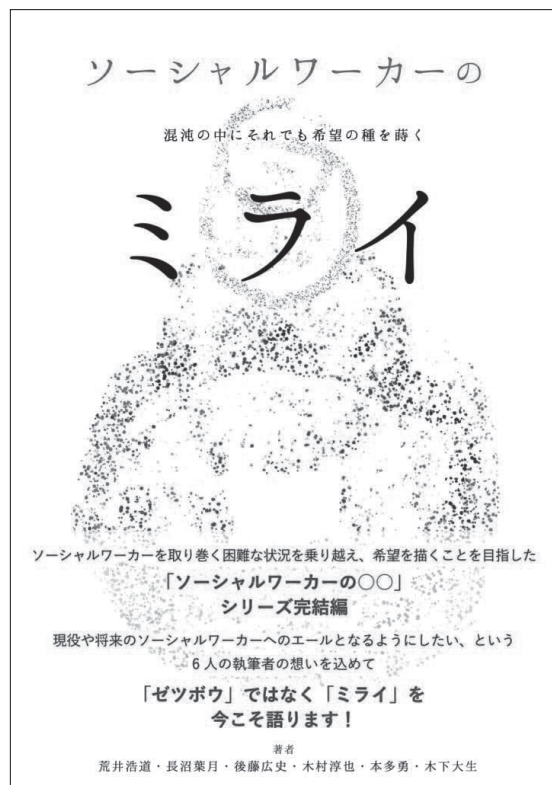
この間、ソーシャルワーカーを取り巻く状況は、年々厳しいものになっていきました。賃金はなかなか上がらず、雇用は一層不安定になっています。多職種連携が強調されるなかで、頼みの綱の専門性が揺らいでいます。卒後第一の進路としてソーシャルワーカーを選ばない学生も増えています。さらには、ソーシャルワーカー養成を止めてしまう大学等も出始めています。その結果、福祉人材の不足は一層深刻化しています。

このような状況を踏まえ、これからソーシャルワーカーとなろうと勉学に励んでいる方や現役のソーシャルワーカーに向けて、僭越ながらも一度だけエールをお送りしようと 6 名は再び集まりました。

本書は、全 6 章で構成され、6 名の執筆者が 1 章ずつを担当しています。各章のタイトルは以下のとおりです。

CHAPTER 1「誰もがソーシャルワーカーである社会へー学生の視点から考えるソーシャルワーカーの『ミライ』」（後藤広史）、CHAPTER 2「“専門性”以前の“支援”ー“個”としての支援者」（荒井浩道）、CHAPTER 3「力のない私たちでも／だからこそできる『その場しのぎ』」（長沼葉月）、CHAPTER 4「『うろたえる』ソーシャルワーカー」（木村淳也）、CHAPTER 5「ソーシャルワーカーをやめないー『幸せ』な社会になるように」（本多勇）、CHAPTER 6「ソーシャルワーカーのこれまでとこれからー現状から未来に向けてなされなすべきことの試論的提起」（木下大生）。

いずれの章でも、「このシリーズだからこそ言えること」、さらには「最後だからこそ言わなければならないこと」がホンネで書かれています。本書を読んでくださった方、お一人お一人の「ミライ」に少しでも貢献できればという想いが込められています。



Ⅶ. 会員の声

入会に際して

北九州市立大学 寺田 千栄子

この度、日本ソーシャルワーク学会に入会させていただきました寺田千栄子と申します。北九州市立大学基盤教育センター・地域創生学群にて、ソーシャルワークに関連する科目や研究を行っております。専門は、学校ソーシャルワークです。特に、近年はLGBTQ+をはじめとした多様な性の児童生徒への学校におけるソーシャルワークに関する研究などを行っています。今後も、当該分野の発展的な研究など、学校教育環境において多様性が尊重されるよう働きかけをおこなっていきたいと考えております。

どうぞ、ご教示くださいますようお願い申し上げます。

入会にあたって

名古屋市社会福祉協議会 杉本 一美

このたび、入会させていただきました杉本といいます。私は、社会福祉士が国家資格になる前に大学を卒業し、病院でソーシャルワーカーとして勤務しました。一身上の都合で一時現場を離れていましたが、社会福祉士を取得後、24年間現在所属する法人が運営する地域包括支援センターや認知症施策の中核機関等で高齢者、若年性認知症の人・家族への支援を中心に働いてきました。卒業してから、ずっと自身に問いかけてきた“社会福祉とは、ソーシャルワーカーの専門性とは？”という問いに近づくために2020年日本福祉大学大学院修士課程入学し「現場におけるソーシャルワーカーの実践力獲得について」研究する機会を頂きました。現在は、地域包括支援センターで社会福祉士、認知症地域支援推進員をしながら、大学の実務家教員、非常勤講師として学生と一緒にソーシャルワークについて考える機会を持っています。この学会を通して、自身の実践を振り返りながらソーシャルワークについてより深く学び、その学びを現場に還元していきたく考えています。今後ともご指導のほどよろしくお願い申し上げます。

編 集 後 記

日本ソーシャルワーク学会通信 140 号（ニュースレター）をお届けします。

今年の夏も猛暑と自然災害に見舞われました。国外では戦争や紛争が長期化し子どもの被害や難民問題のニュースが入ってきます。

今回の特集しました東京都立大学で開催された第 41 回大会のテーマ、そして渡辺先生の巻頭言からも、このような中でソーシャルワーカーの役割が、問われていると痛感いたします。

本学会では、さまざまな企画をし、会員の皆様に参加とご協力をお待ちしております。

北星学園大学 池田 雅子

（学会理事／総務委員会・研究推進第 3 委員会）

【日本ソーシャルワーク学会事務局】

〒162-0825 東京都新宿区神楽坂 4-1-1 オザワビル 2F（株） ワールドプランニング内

TEL：03-5206-7431 FAX：03-5206-7757

E-mail：jsssw@worldpl.co.jp <http://www.jsssw.org>